

『撰集抄』と『春日権現験記絵』詞書との使用語比較

——「侍り」及び「候ふ」——

森 瀬 代士枝

はじめに

『撰集抄』に『春日権現験記絵』詞書と類似・関連する箇所のあることは、既に、複数の論者により複数箇所について指摘されている。それら指摘のほとんどは、他の問題を論ずる際に言及されているものである。

『撰集抄』と『春日権現験記絵』詞書（以後『春日験記』と略称）とに類似・関連の箇所があるという事を、今少し注視したい。両書の使用語の種々相を比較すれば、『撰集抄』の特色が見えてくるのではあるまいか。

本稿では、丁寧語の「侍り」及び「候ふ」を取り上げる。

丁寧語は、「成立は謙讓語・尊敬語よりも遅く、平安時代以降、これらの語の用法の拡大によって生じたものである。平安時代には、まず『侍り』が謙讓語から転ずる。院政鎌倉時代には、同じく謙讓語から転じた『候』（さぶらふ↓さうらふ）が盛んとなり、一方、『侍り』は古めかしい語感をもつ語として用法も限定される」（国語学研究事典345頁）。おおきくは、このように把握されている国語史の流れの中にあつて、『撰集抄』は会話文にも地の文にも「侍り」

を多用し、「候ふ」を圧倒している。

『春日験記』の場合は、どうであろうか。

また、『撰集抄』への影響を認められている『閑居友』では、丁寧語の使用状況はどうであろうか。

—

まず、『春日験記』に見られる「侍り」と「候ふ」の用例を掲げる(用例番号 巻話 説話題 用例 地の文か会話 文かの別の順に記した)。

- ①巻一第二話 承平託宣事 千良申けるは、「菩薩の御名をばいかゞ申侍覽」と申せば、「慈悲万行菩薩」と 会
- ②巻一第四話 金峯山御幸事 龍顔逆鱗の氣ありておほせらるゝやう「春日山の邊に侍おきなゝり。 会
- ③巻二第二話 永久衆徒鬪乱事 「君いとけなく御坐せし時、御殿の天井に振動事侍き。大にあやしみを 会
- ④巻三第三話 信經事 あまりに心うく侍れば、ねてもさめてもなげくこと、たゞこればかり也」と申て 会
- ⑤巻四第二話 永久春日詣時神託事 この童の申様「我は是春日第三神也。このたび見参はことにうれしく侍り。 会
- ⑥巻四第二話 永久春日詣時神託事 随喜の涙のところせきをもしらせたてまつらんとて託宣し侍り。 会
- ⑦巻八第一話 清涼寺本尊事 「わが身はもと南京菩提山の邊にすみ侍し程に、つねに春日社に参しに、 会
- ⑧巻八第四話 壹和僧都事 「おもひもよらぬ仰かな。かゝる乞食修行者になにのうらみか侍べき。 会
- ⑨巻十第一話 林懷僧都事 神慮にかなふべしとこそ心をやり侍に、 会
- ⑩巻十一第一話 恵暁法印事 ゆえをとへば「我、炎魔王宮より請せられてむかひ侍つれば、 会

- ① 卷十二第三話 恩覺事 「いかにあの僧をばめしをかれて候や覽。我もとにとしごろ侍て
会
- ② 卷十二第三話 恩覺事 我もとにとしごろ侍て修学稽古の道も抜群して侍しかば、
会
- ③ 卷十二第三話 恩覺事 返々不便におぼえ侍しかども淨業すでに純熟して順次に都率の内院に
会
- ④ 卷十二第三話 恩覺事 順次に都率の内院に生べき者にて侍り。富貴の報を得なば上生のさまたげ
会
- ⑤ 卷十二第三話 恩覺事 上生のさまたげあるべきによりてわざと福分をあたへ侍ざりしに、
会
- ⑥ 卷十二第三話 恩覺事 順生はあく道の報のがれがたし。不便にも侍ことかな」と
会
- ⑦ 卷十四第二話 隆覚僧正事 「寺中に我ばかりなる寺僧の有がたく侍に、思食はなつ事こそ口おしけれ」と
会
- ⑧ 卷十四第四話 『唯識論』安置屋遁火災事 かのなげしにいかなる事か侍らん」といふ。
会
- ⑨ 卷十五第四話 紀伊寺主事 このよしをいひつかはす返事に「ずいぶむ寺僧の御事は忠を存侍。
会
- ⑩ 卷十五第四話 紀伊寺主事 「夜べの御返事あしく申たる、返々をそれ覚侍ば、いそぎまいりたるなり」
会
- ⑪ 卷十六第二話 璋円事 この方便によりて漸々にうかびいで、侍なり。
会
- ⑫ 卷十六第二話 璋円事 まのあたり大明神の御説法聽聞することぞ、かたじけなくはべれ」と語ける。
会
- ⑬ 卷十七第一話 明恵上人事 御房の唐へ御わたりの事、きわめてなげかしく侍れば、
会
- ⑭ 卷十七第一話 明恵上人事 「何ともしらず。わらはも身のかうばしく覺て見參のしたく侍つる也。
会
- ⑮ 卷十七第一話 明恵上人事 「たかき所に侍、無礼なれども、我等がともがらは、本より
会
- ⑯ 卷十八第一話 同事 鹿の膝を、りし事は、われ三日さきだちて御迎にまいりて侍ししるしなり。
会
- ⑰ 卷十八第一話 同事 聽聞して、礼盤より左の方すこし仏前によりて三尺許あがりて侍し也。
会
- ⑱ 卷五第一話 俊盛卿事 社壇にまうで、侍けるに、夜雨蕭々として、松壩寂々たりければ、
地

- ②9 卷五第一話 俊盛卿事 随喜の涙いかばかりかとおもひやる袖さへ今もしほれ侍り。地
- ③0 卷七第二話 開蓮房夢事 興福寺に尊遍侍従といふ僧の母に開蓮房と申比丘尼侍けり。地
- ③1 卷七第三話 近真陵王事 幣殿の前の藤のもとに侍て、御殿の方を拝すれば、地
- ③2 卷七第三話 近真陵王事 範顯やがて禅定院に侍ける椀の本様を申出て、其まゝに作て錦の袋に入て、地
- ③3 卷十第二話 永超僧都事 同人僧都と申けるころ、洛陽法成寺の僧房にすみ侍けるに、地
- ③4 卷十第二話 永超僧都事 垂纓のうへに率川の大明神の銘ありと申説も侍にや。地
- ③5 卷十一第一話 恵暁法印事 書寫山にすみ侍て、としををくりけれども 地
- ③6 卷十二第三話 恩覺事 八幡の宮寺にながしの入寺とかや申ける社僧に同宿してすみ侍けるほどに、地
- ③7 卷十三第二話 勝詮僧都事 勝詮僧都安元年中維摩会の講師をつとめんがために中室にうつりて侍ける時、地
- ③8 卷十三第三話 増慶事 さても『唯識論』の見文は「由不放逸、先除雜染」と侍。地
- ③9 卷十五第三話 大乘院僧正事 脇足にかゝりながら聊まどろみ給けるが、をどろきて前にはべる頼憲と申僧に地
- ④0 卷十五第三話 大乘院僧正事 尊遍得業といふ僧をなしく菩提山に侍ける夢にも「房中を見めぐるに、地
- ④1 卷十六第二話 璋円事 無仏の導師付属の薩埵也。本地垂跡いづれものもしくこそ侍れ。地
- ④2 卷十七第一話 明恵上人事 そのかみ、高尾牢籠の事侍しかば、しばし紀伊國白上といふ所におはしけるに、地
- ④3 卷十七第一話 明恵上人事 上人かたじけなくこの仰をかぶり侍れば「渡海をとゝむべし」と申さる。地
- ④4 卷二十第一話 嘉元神火事 衆徒神人などおほく召とられて、當國に地頭ををかるゝ事侍き。地
- ① 卷三第三話 信經事 や、ひさしくして「けふはすでに百卅日になり候ぬ」と申せば、会
- ② 卷三第三話 信經事 日々にめのとがふところにいだかせて、みやまをふます」と申候き。会

- ③ 卷七第一話 經通卿事 忽に神恩をかぶりて、かゝるよろこびをこそして候へ」とて涙を、さへてまかりいづ。 会
- ④ 卷七第三話 近真陵王事 『家につたふる椀の候はねば、えつかふまつらじ』と申也。 会
- ⑤ 卷七第三話 近真陵王事 「たゞしこのよしを仰候とも近真承引し候はじ」と申せば、 会
- ⑥ 卷七第三話 近真陵王事 「たゞしこのよしを仰候とも近真承引し候はじ」と申せば、 会
- ⑦ 卷十二第一話 藏俊贈僧正事 「学問つかまつるはおなじことにや候」と申せば、 会
- ⑧ 卷十二第三話 恩覺事 「いかにあの僧をばめしをかれて候や覽。 会
- ⑨ 卷十五第一話 唐院得業事 つや／＼思わすれて「こは何事に候らん」と申ければ、 会
- ⑩ 卷十七第一話 明恵上人事 三人と申は御房と解脱房と、又京に一人候なり。 会
- ⑪ 卷十七第一話 明恵上人事 解脱御房は、不思議にあはれに候人なり」と四五度おほせられても 会
- ⑫ 卷十七第一話 明恵上人事 「籠居の事、我等うけず。かくと申と御物語候べし」とのたまふ。 会
- ⑬ 卷十八第一話 同事 「この見参にすぎたるかたみや候べき。 会
- ⑭ 卷一第二話 承平詫宣事 神殿守ならびに預などをめしあつむれば、おの／＼つ、しみおそれて候。 地
- ⑮ 卷一第二話 承平詫宣事 又、今月廿三日より御讀經に候興福寺僧勝圓をめす。 地
- ⑯ 卷一第四話 金峯山御幸事 大納言師忠 中宮大夫雅實など候はれけるを御覽しまはして、 地
- ⑰ 卷二第二話 永久衆徒鬪乱事 修理大夫顕季卿 仙洞の近臣にて候けるが、恐ながら奏申けるは 地
- ⑱ 卷四第一話 天狗参入東三條事 その御聲につきて春日神主時盛まいりて候けり。 地
- ⑲ 卷四第五話 後徳大寺左府事 若宮の御前にみこども候て、神楽のほどなりけるに、 地
- ⑳ 卷七第一話 經通卿事 春日に参籠して、夜は楼門の下に候て、よもすがら神楽をうたひ 地

② 卷七第三話 近真陵王事 範顯かしこまりて承候ぬ。「たゞし

③ 卷十六第一話 解脱上人事 若宮の御前にまいりて拝殿に候ほども、

以上、「侍り」四四例（会話文二七、地の文一七）、「候ふ」二二例（会話文二三、地の文九）を調査対象とする。¹⁾

地 地

二

最初に、同文的類話のある話について、『春日験記』の「侍り」「候ふ」使用文に相応する文で、類話での「侍り」「候ふ」使用状況を見比べてみたい。類話は、竹居明男『日本古代仏教の文化史』（287～291頁）にゴチック表示する、文章の細部に至るまで強い類似性を示す説話（同時代ないし先行文献）に限り、加えて、近本謙介「春日をめぐる因縁と言説―貞慶と『春日権現験記絵』に関する新資料―」に示された『俊盛卿因縁』を調査した。

その結果、『春日験記』でも類話でも同じく「侍り」「候ふ」使用（⑤⑥⑧『撰集抄』、④⑥⑦『教訓抄』、②①②②『沙石集』、①①①③『明恵上人神現伝記』『高弁記』）の場合がある他に、

・類話に相当文の無い場合（⑧⑨『雑談集』、②③④⑤④③『明恵上人神現伝記』『高弁記』、②⑧②⑨『俊盛卿因縁』、①④『続教訓抄』）

・在っても「侍り」「候ふ」不使用の場合（③①フリーア本『地藏菩薩靈験記絵巻』、③②『教訓抄』『フリーア本』、④①『沙石集』、④④⑥『フリーア本』、①⑤『続教訓抄』）

・『春日験記』の「侍り」使用文が、類話では「候ふ」使用となっている場合（①『続教訓抄』、③①『教訓抄』、②⑥②⑦『明恵上人神現伝記』『高弁記』）などが見られた。

同時代ないし先行文献所載の類話とは相違する「侍り」「候ふ」の使用があることから、『春日験記』は、独自に丁寧語を選択使用しているものと考えてよいと思われる。

つぎに、会話文の「侍り」「候ふ」使用状況と、判明している説話設定年代とを見比べると、「侍り」使用例は、九三七年(承平七年・巻一第二話)～一二三一年(寛喜三年、寛喜の大飢饉・巻十五第四話)の間の話に現れる。「候ふ」使用例は、一〇九七年(法性寺殿生年・巻三第三話)～一二二七年(建保五年・巻七第三話)の間の話に見られる。「侍り」は、説話設定年代の幅広く現れ、「候ふ」は、中間的年代設定の説話に現れている。「中古において盛んに使用されていた丁寧語の「侍り」は、おおよそ一二世紀末までには口頭語の世界からは消えていったと考えられている(講座日本語学9敬語史177頁)ので、一二世紀末までの年代設定の話で用例を見ると、「侍り」十例、「候ふ」三例である。一三世紀以降に設定された話では、「侍り」十例、「候ふ」八例が見られる。

『春日験記』には、登場人物の夢の中が会話場面となっている例が多く見られる(⑨⑪⑬⑯⑰⑱⑲)。また、話者が聞き手が憑依状態か半夢半醒である場合も多い(①②⑤⑥⑧⑯⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙)のではあるが、話者と聞き手は次の如くである(↓の上方は話者、下方は聞き手)。

「侍り」使用では、

①天台山修行の僧千良↓橘氏女(春日大明神憑依) ②太上天皇白河院(例ならぬ御けしき)↓人々(含大納言師忠・中宮大夫雅實) ③修理大夫顕季卿↓白河上皇 ④信經↓法性寺殿 ⑤⑥童(春日第三神憑依)↓知足院殿下 ⑦京にある尼公↓嵯峨の釋迦堂の仁雅法眼 ⑧壹和僧都↓けしかる聖Ⅱ魂(憑依) ⑨林懷僧都(微睡んでいた)↓笏もちたる高貴の人(春日権現) ⑩惠暁法印↓修南院の人々(弟子) ⑪⑬⑯恩覺の夢のうちの客人↓恩覺⑰隆覚僧正(半夢半醒)↓春日明神⑱京に焼け残りたる一字の隣家の人↓人々⑲⑳紀伊寺主↓中室の法泉房㉑㉒璋円(女につく)↓人々㉓㉔㉕橘

氏女（春日大明神憑依）↓明恵上人

「候ふ」使用では、

① ② 信經↓法性寺殿 ③ 經通卿↓寺僧達 ④（近真↓束帯の俗） ⑤ ⑥ 範頭↓束帯の俗 ⑦ 藏俊贈僧正↓春日一宮 ⑧ 恩覺の夢
のうちの客人↓恩覺 ⑨ 唐院得業↓巫女（春日大明神憑依） ⑩ ⑪ ⑫ ↓橘氏女（春日大明神憑依） ↓明恵上人

「侍り」の使用対象上限は白河上皇（③）、「候ふ」使用対象上限は、法性寺殿である（① ②）。上記法性寺殿（藤原忠通）は、摂政・関白藤原忠実の長男であり、権中納言、権大納言を経、当該説話の設定年代内の永久三年（一一一五）、内大臣に至っている。これは、上皇と同じく最高の段階に属す聞き手と考えられる（桜井光昭『今昔物語の語法の研究』10、11頁）。

同じ話者から同じ聞き手への会話文に「侍り」も「候ふ」も共に使われる例が一例ならずある（④ ① ②、⑪ ⑫ ⑬、⑭ ⑮ ⑯ ⑰）。

このような「侍り」と「候ふ」の共（混）用は、夢の中での会話・話者が憑依状態での会話のみならず、通常の会話（④ ① ②）にも現れている。地の文を見ても、同一話の地の文中に「侍り」と「候ふ」共存の例がある（⑳ ㉑）。

三

『撰集抄』については、『撰集抄の侍り』（櫻井光昭 國語學 99 昭和四九年）に調査研究がなされている。

『春日験記』の「侍り」も、右のご論考と同じ観点から見て『撰集抄』と比較し、同時に『閑居友』にも言及して、本稿のまとめとする。

使用数からいうと、『春日験記』では「侍り」の方が「候ふ」より多い(二倍)。「侍り」優勢ということでは、『春日験記』と『撰集抄』とは同傾向といえることができる。しかし『春日験記』の「候ふ」は「侍り」のおお半数使われているので、『撰集抄』に「侍り」が圧倒的多数用いられていることは違いを見せている。『閑居友』では、「侍り」四三二例に対して「候ふ」一例となっている。^③『撰集抄』は、「侍り」が圧倒的に多い点で『閑居友』に近似する。

試みに作品の総字数を概算して、何字ごとに一回の割で「侍り」の出現があるかを求めてみると、『撰集抄』(松平文庫本)では約五四字、『春日験記』は約七三八字、『閑居友』(尊経閣文庫本)では約九八字ごと、ということになり、『撰集抄』の「侍り」の出現頻度の高いことが分かる。

『撰集抄』の「侍り」は、尊敬語を受ける。

『春日験記』には、尊敬語を受ける「侍り」は見られない。『閑居友』の「侍り」も直上の尊敬語を受けない。

『撰集抄』の「侍り」は、命令形の用法を持つ。

『春日験記』では、命令形の用法が見えない。『閑居友』は命令形の用法を持つ(七七四・一四三^④)。

『撰集抄』の「侍り」は、約四・五対一の割で地の文の用例が多い。

『春日験記』では、約〇・六対一の割で会話文の用例が多い。『閑居友』では、約二・二対一の割で地の文の用例が多い。地の文の方に多く「侍り」の現れている点で『撰集抄』と『閑居友』とは似る。

『撰集抄』の「侍り」は、話し手より聞き手上位の場合の使用対象の上限は最高段階にいたっている。

『春日験記』(③修理大夫顕季卿↓白河上皇)、『閑居友』(下の八 尼↓後白河法皇)の場合も同様である。

『撰集抄』の「侍り」は、話し手の方が聞き手より上位の例は少くない。

『春日験記』にも、下位の者への使用例がある(⑩惠暁法印↓修南院の人々<弟子>)。『閑居友』では、空也上人が

弟子へ(上の四)、男が供へ(下の五)「侍り」を用いて話している。

右の比較をまとめると、『撰集抄』『春日験記』『閑居友』三書の「侍り」に共通するのは、「使用対象の上限が最高段階にいたっている」「話し手の方が聞き手より上位の例がある」ということであり、『撰集抄』の「侍り」のみに見られる特徴は、直上の「尊敬語を受ける」ということである。

注

(1) 「侍」は、「はべれ」(22)「はべる」(39)と仮名表記が見られる。「候」は、全例漢字表記で、見えている送り仮名は「は」(46)(10)「へ」(8)である。『春日験記』は読み仮名を付さない。本稿では、「侍」は「はべり」、「候」は「さぶらふ」と読むこととした。全例を丁寧語として扱う。

(2) 「金沢文庫研究」302号 一九九九年

(3) 『校本閑居友』(濱千代清 168頁)。尊経閣文庫本と岩瀬文庫本に「候」が一例ある。この箇所、他の伝本では「御」、「御候敷」となっている。

(4) 『閑居友 本文及び総索引』(峰岸明・王朝文学研究会編 164頁)。中世の文学『閑居友』(美濃部重克校注)、新日本古典文学大系『閑居友』(小島孝之校注)も参照した。

・用例本文は、続日本の絵巻13・14『春日権現験記絵 上下』(中央公論社 一九九一年)に見える詞書に拠り、句読点・濁点・カギカッコは私に付した。上掲書 詞書釈文、日本繪巻物全集15巻『春日権現験記繪』(角川書店 一九六三年) 詞書、続日本絵巻大成14・15『春日権現験記絵 上下』(中央公論社 一九八二年) 久保木彰一編 詞書 釈文を参照させていた。